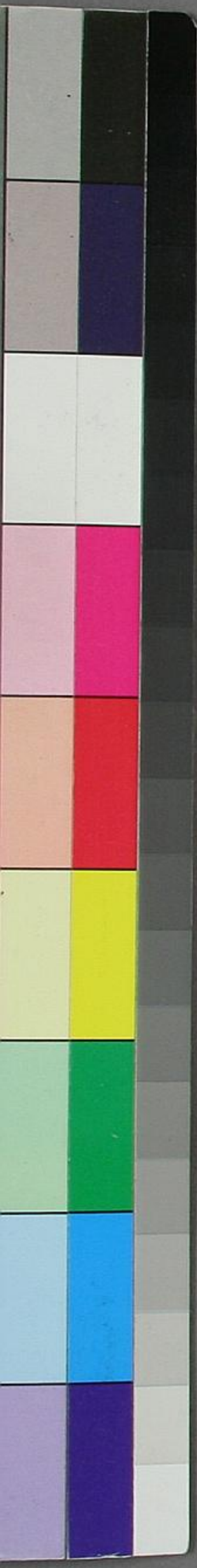


曆日護解

全

二五
2186



二五
2186
巻

弓安 柳精子著

測景

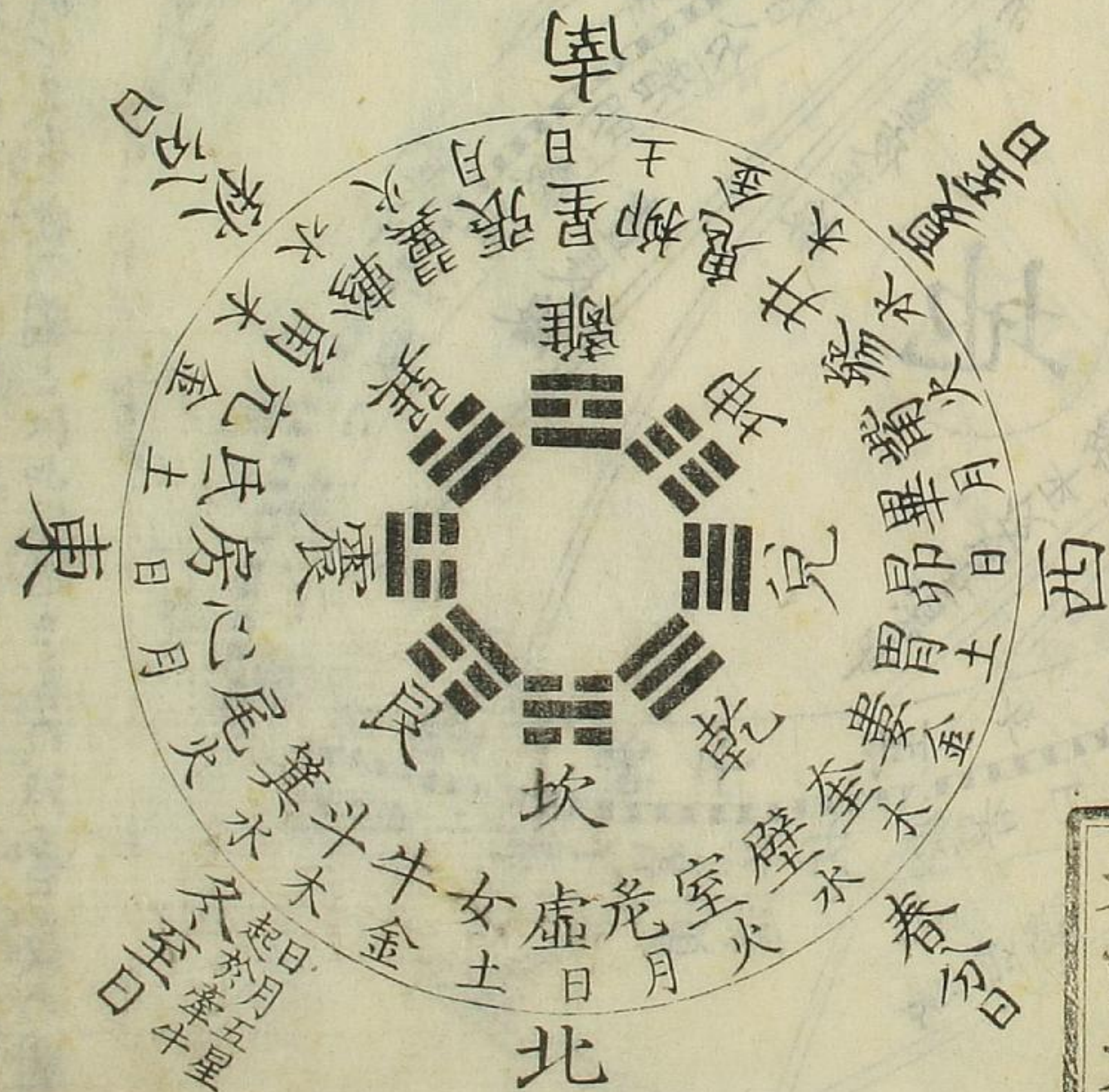
曆回諒解

江戸書林 千鍾房

太田文庫

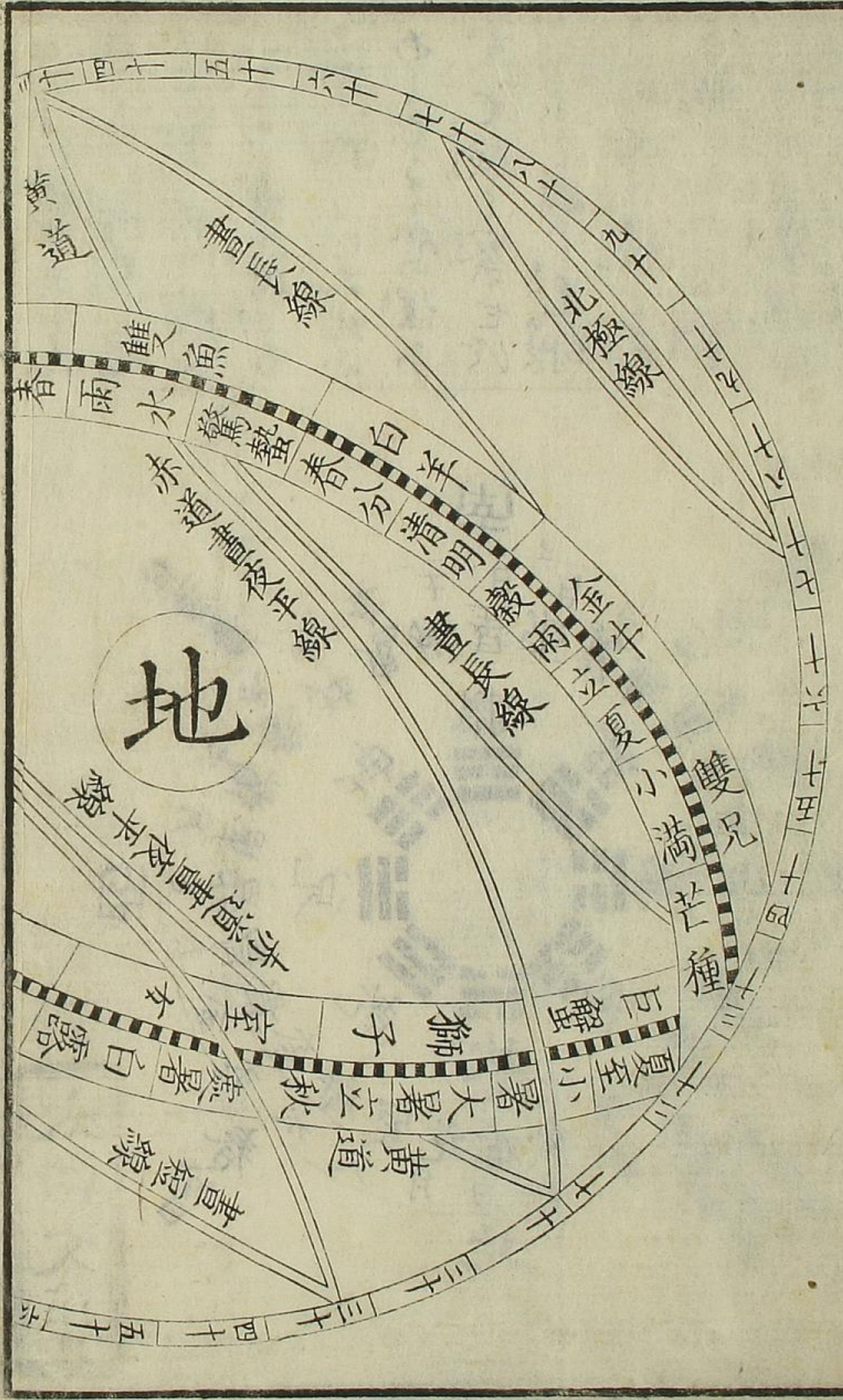
宮川貞二

古一伏羲の天下に
五つりし時易を化
して万民の用と
なるを欲はれども
遠く他へ天地の
あつたをこれの理小
かいて験と察せし
ことと形と先仰
て経緯の象と天
小観と日月星
辰の其盈虧消息
隠見往来の故と
素一をよとよこ

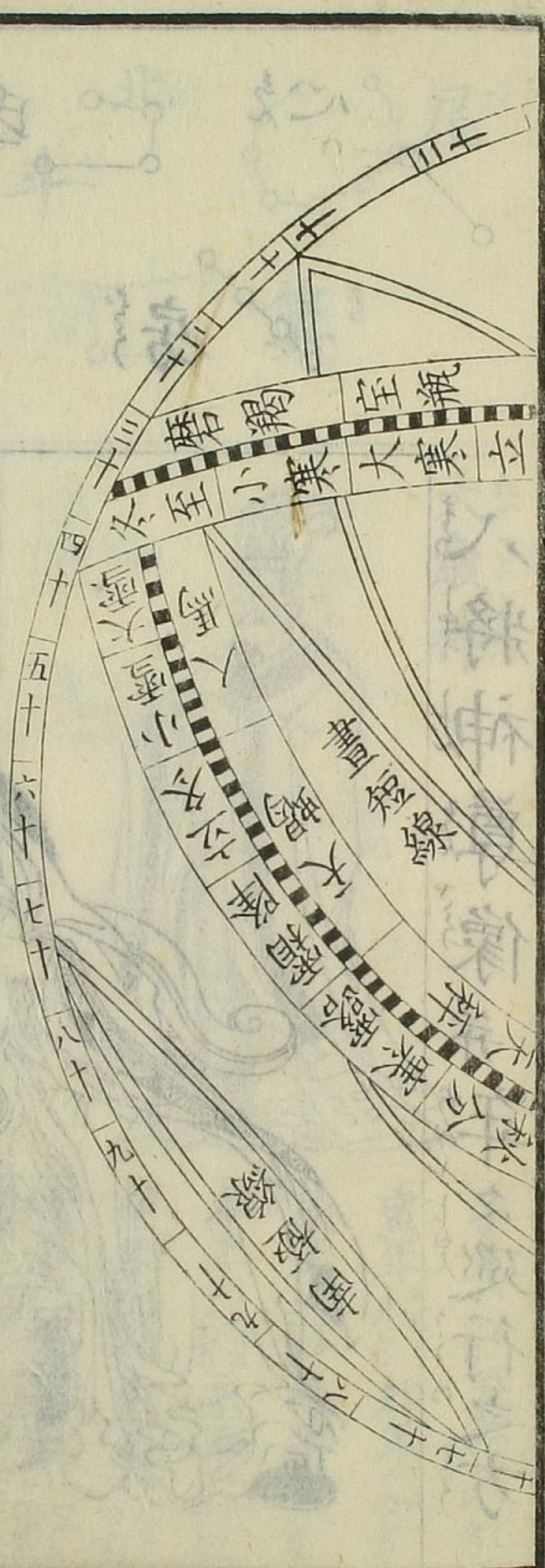


香月 羊屏

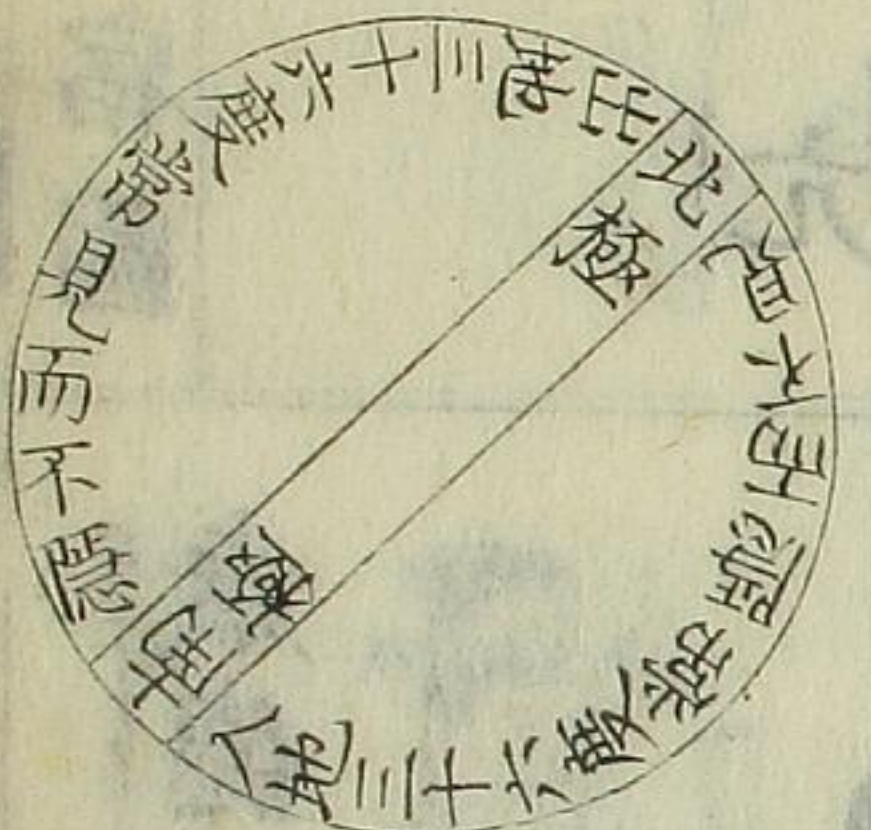
此圖子午對すのものと南極と北極とに分るものと赤道の圖とに斜め赤道の絡その成
黄道乃圖といふにちうたりのものと又赤道の圖といふに近きものと成る長の圖とを



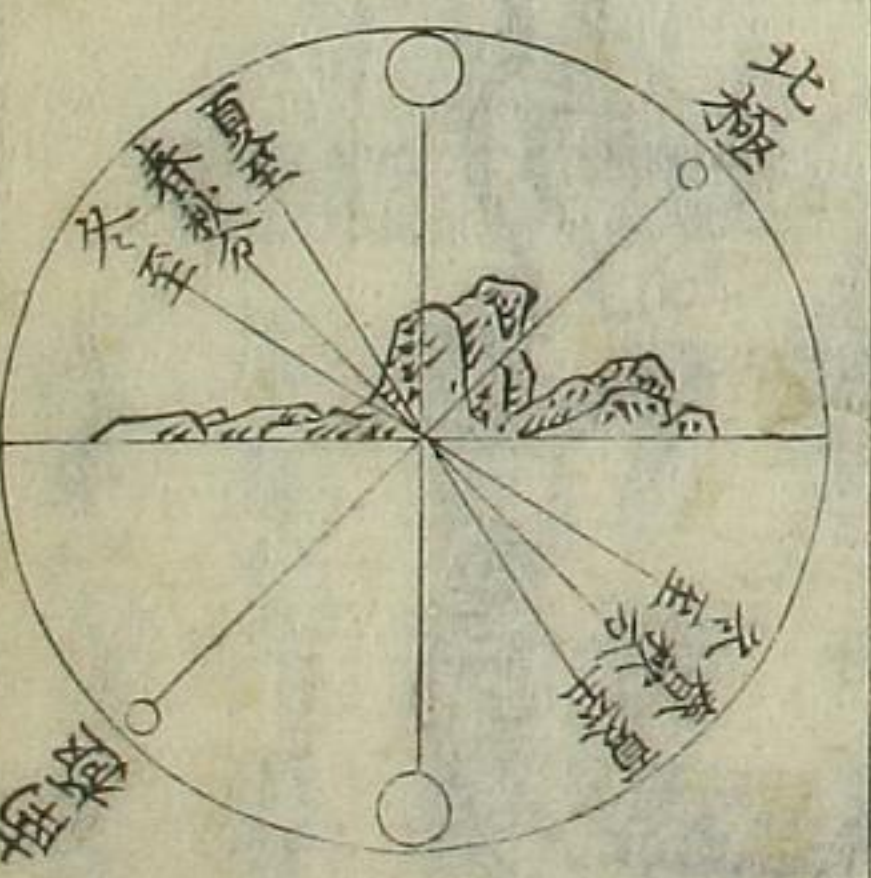
あるちうたりのものと南極の圖とに斜め赤道の絡その成
のうちにちうたりのものと又赤道の圖といふに近きものと成る長の圖とを



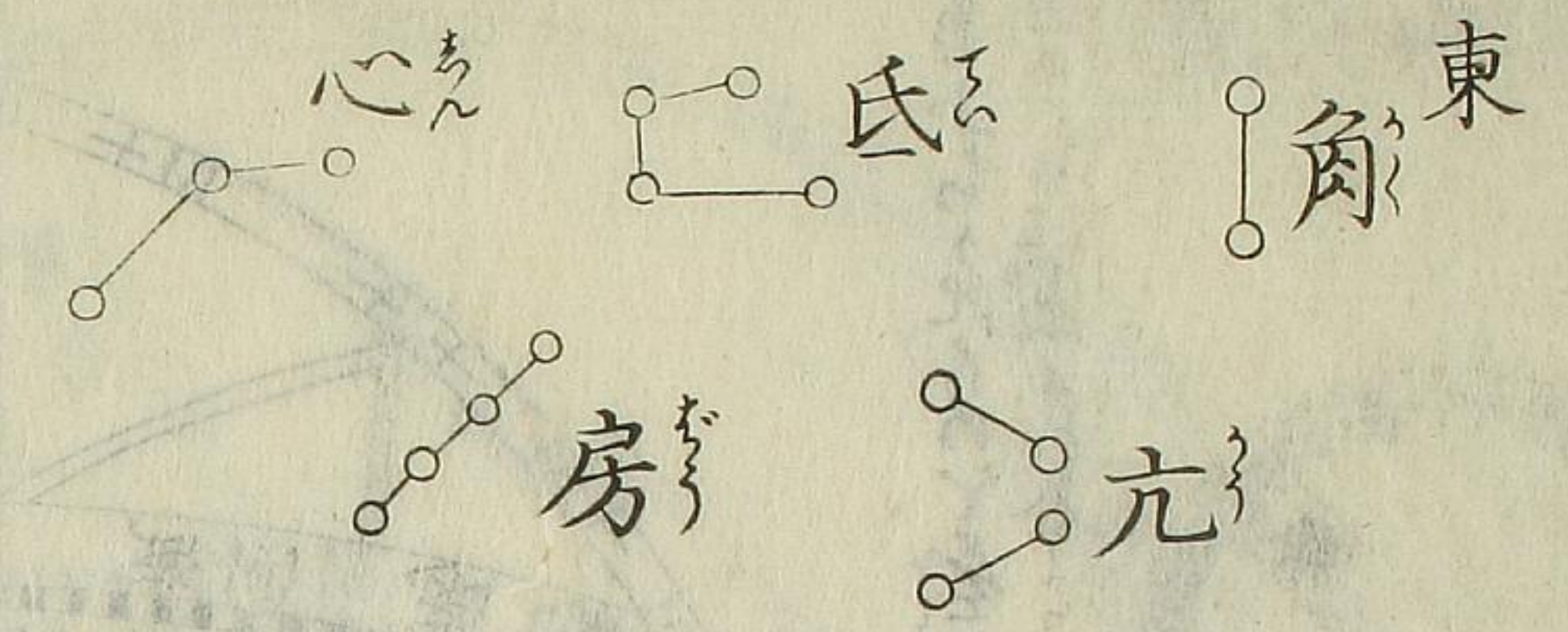
南北極出地



二儀圖



二十八宿圖

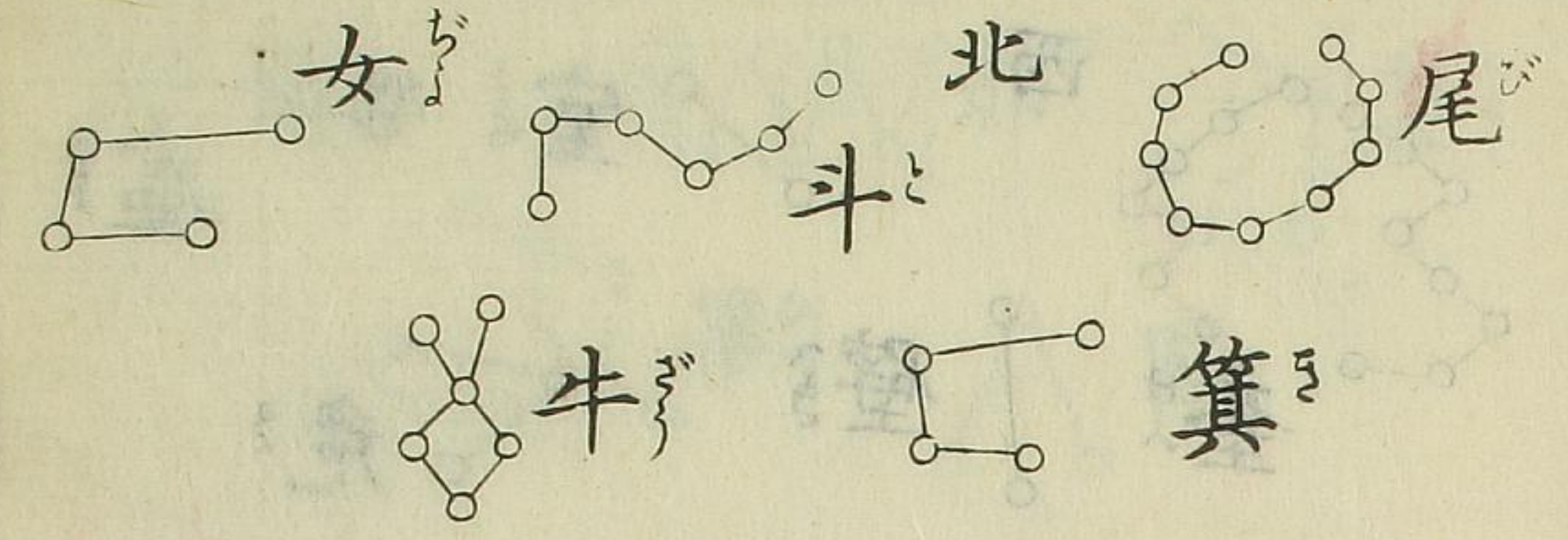


曆日詳解

歳德神尊像



八將神尊像并年々巡行の方



大歳神

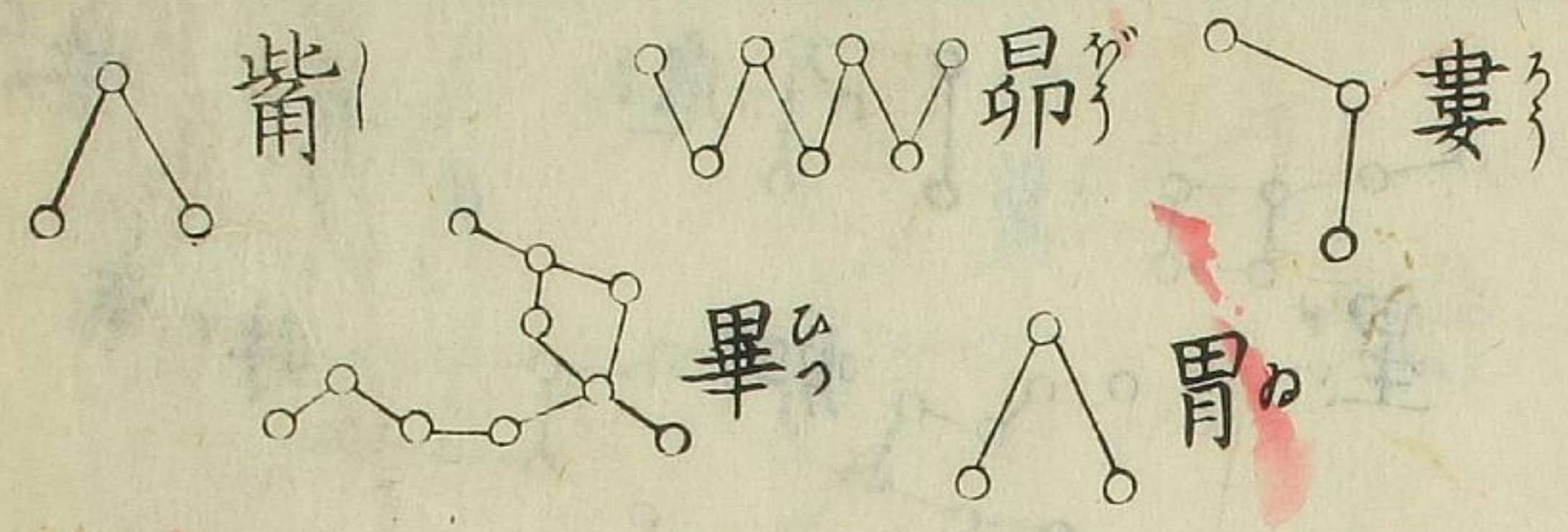


大將軍神



子年ねの方 丑年うしの方
 寅年とらの方 卯年うの方
 辰年たつの方 巳年みの方
 午年うまの方 未年みづの方
 申年さるの方 酉年とりの方
 戌年いぬの方 亥年かの方

曆日詳解

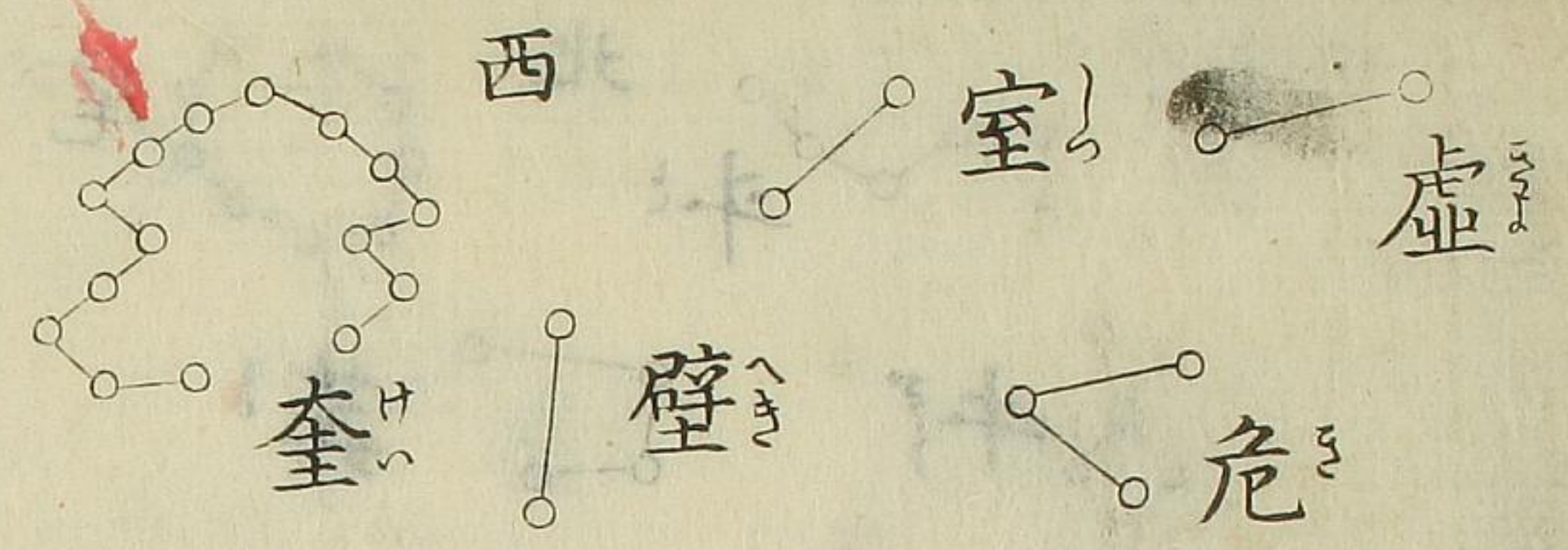


歲殺神



歲破神

子年いね 丑年うしね
寅年いね 卯年うさね
辰年いね 巳年うさね
午年いね 未年うさね
申年いね 酉年うさね
戌年いね 亥年うさね



歲刑神

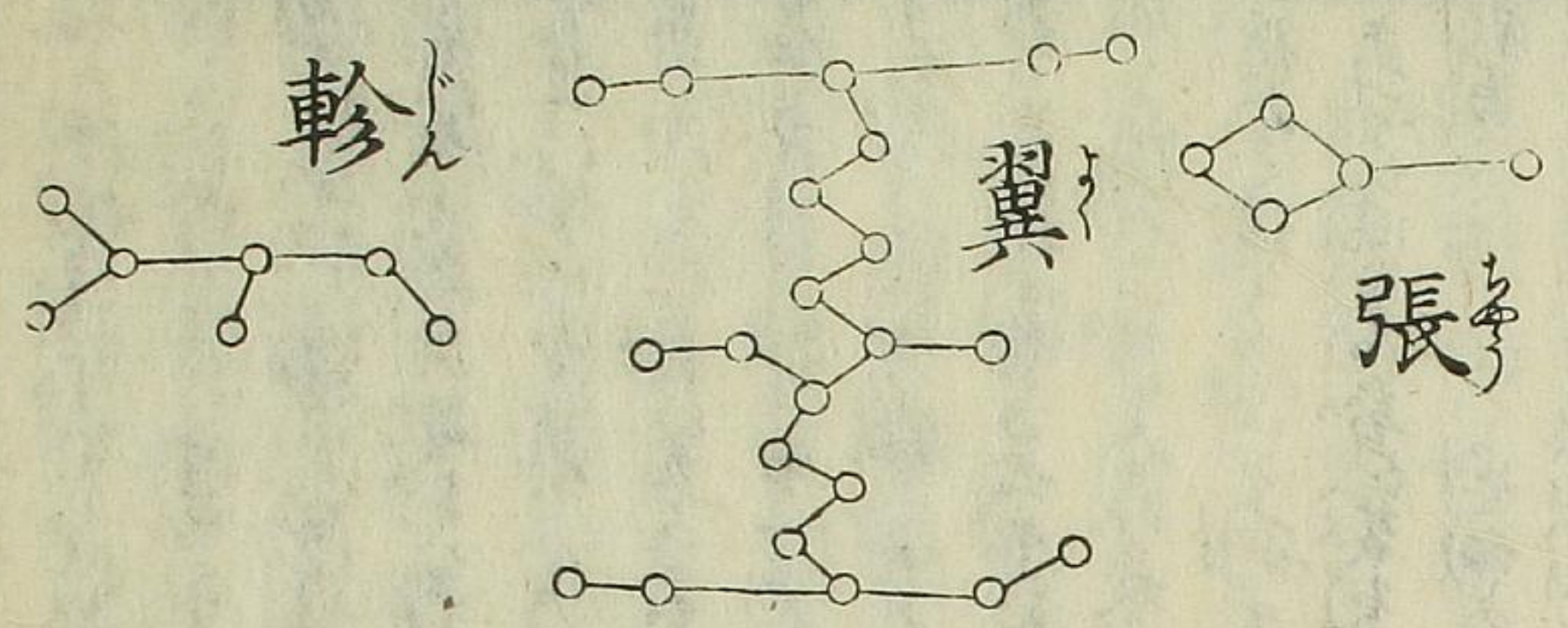


大陰神

子年いね 丑年うしね
寅年いね 卯年うさね
辰年いね 巳年うさね
午年いね 未年うさね
申年いね 酉年うさね
戌年いね 亥年うさね

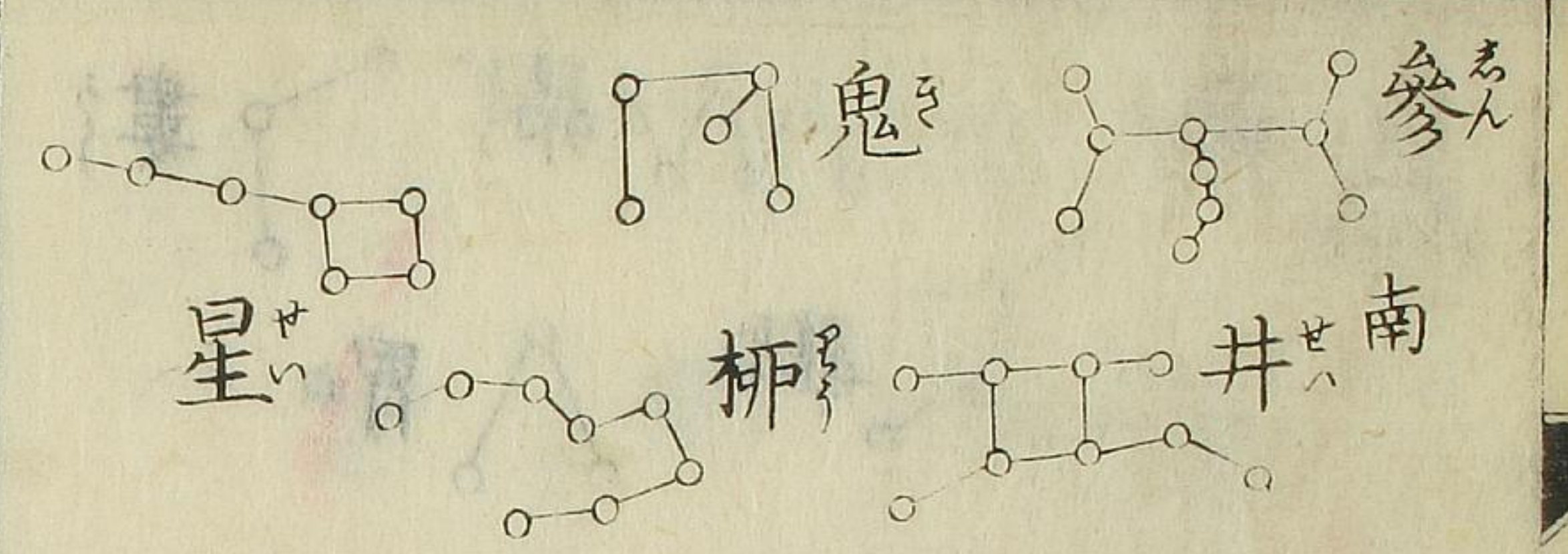
曆日詳解

曆日詳解



曆日詳解

五



曆日詳解

四

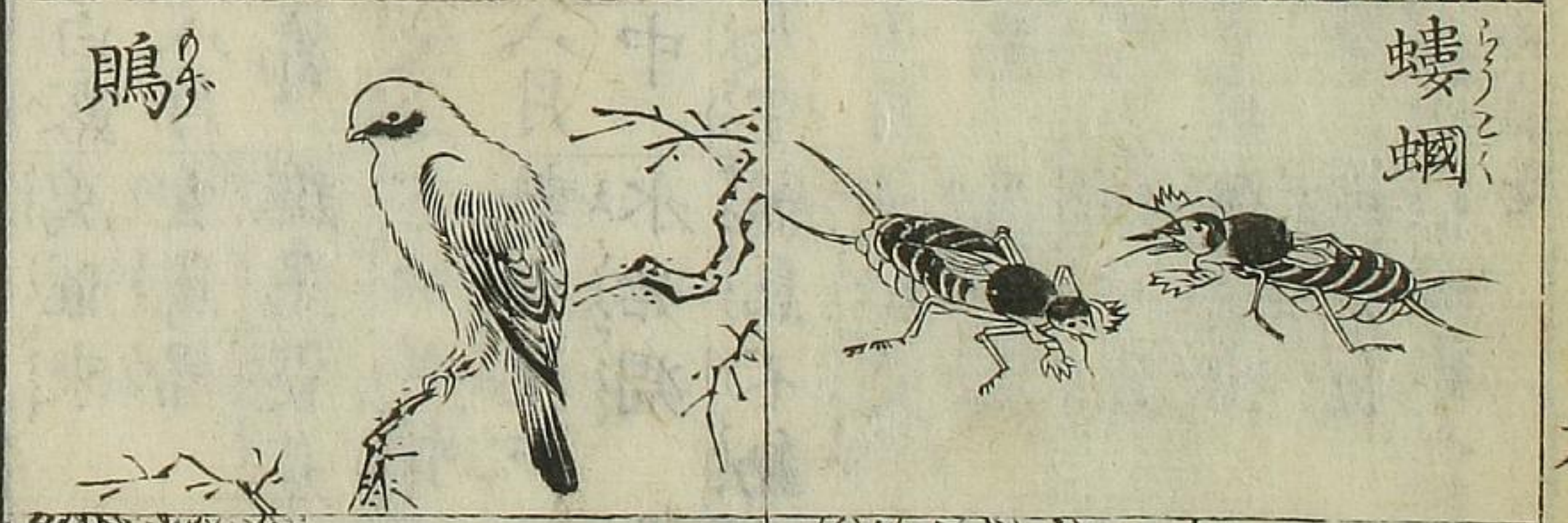
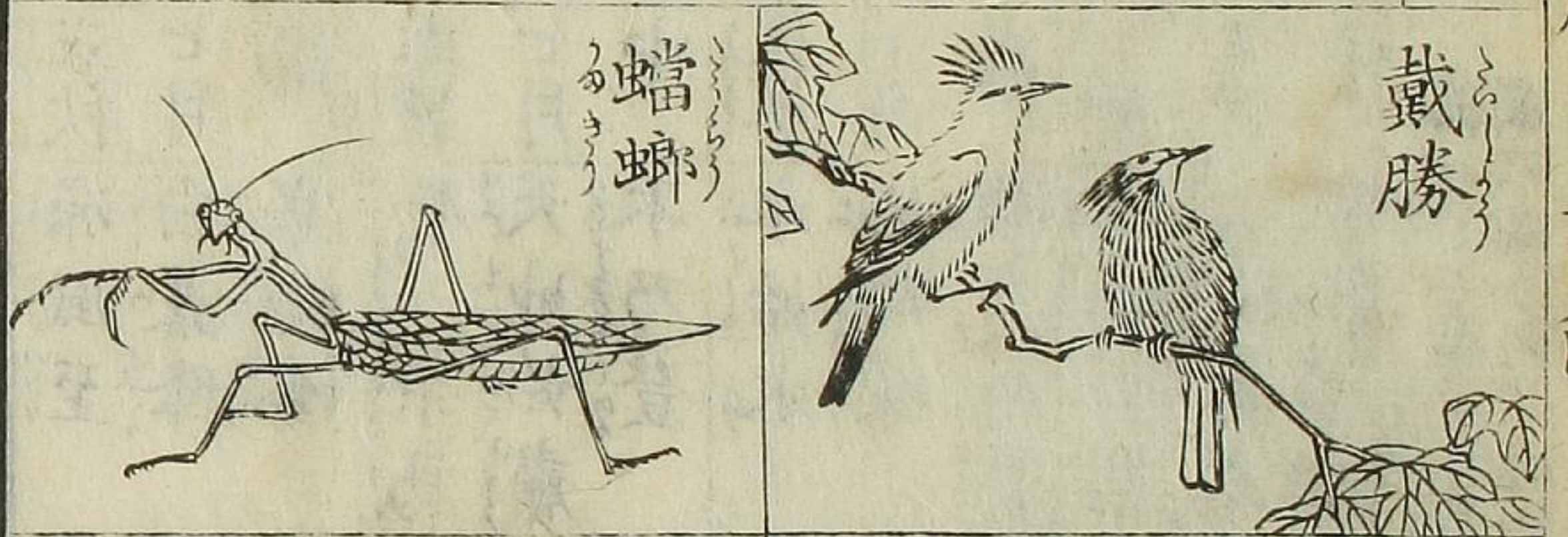
子年ハ 丑年ニ
寅年ハ 卯年ニ
辰年ハ 巳年ニ
午年ハ 未年ニ
申年ハ 酉年ニ
戌年ハ 亥年ニ
子年ハ 丑年ニ
寅年ハ 卯年ニ
辰年ハ 巳年ニ
午年ハ 未年ニ
申年ハ 酉年ニ
戌年ハ 亥年ニ

子歲 丑歲 寅歲 卯歲 辰歲 巳歲 午歲 未歲 申歲 酉歲 戌歲 亥歲

次 皇化 玄朽 折木 大折 壽星 鷄尾 鷄首 實沈 大梁 降婁 限菑



大歲之名
 大歲在甲曰闕逢
 在乙曰旃蒙
 在丙曰柔兆
 在丁曰強圉
 在戊曰著雍
 在己曰屠維
 在庚曰上章
 在辛曰重光
 在壬曰玄黓
 在癸曰昭陽



香日羊解

曆日詳解

六

五性同性別種

甲子乙丑	海中金	丙寅丁卯	爐中火
戊辰己巳	木	庚午辛未	路傍土
壬申癸酉	銅	金	甲戌乙亥
丙子丁丑	澗下水	戊寅己卯	深山土
庚辰辛巳	銀	金	壬申癸未
甲申乙酉	井泉水	丙戌丁亥	屋上土
戊子己丑	龍火	庚寅辛卯	松柏木
壬辰癸巳	長流水	甲午乙未	砂中金
丙申丁酉	山頭火	戊戌己亥	平地木
庚子辛丑	壁土	壬寅癸卯	鐘金
甲辰乙巳	燈臺火	丙午丁未	池水
戊申己酉	大澤土	庚戌辛亥	劍金
壬子癸丑	桑木	甲寅乙卯	水澤水
丙辰丁巳	砂中土	戊午己未	天上火
庚申辛酉	石榴木	壬戌癸亥	大海水

十二月廿四節刻量

立春	○ 早三刻五分	雨水	○ 早六刻五分
二月節	○ 早六刻五分	春分	○ 早十刻
三月節	○ 早七刻五分	清明	○ 早二刻十分
四月節	○ 早七刻五分	立夏	○ 早六刻十分
五月節	○ 早七刻五分	芒種	○ 早六刻十分
六月節	○ 早七刻五分	小暑	○ 早六刻十分
七月節	○ 早七刻五分	立秋	○ 早六刻十分
八月節	○ 早七刻五分	白露	○ 早七刻五分
九月節	○ 早七刻五分	寒露	○ 早七刻五分
十月節	○ 早七刻五分	霜降	○ 早七刻五分
十一月節	○ 早七刻五分	小雪	○ 早七刻五分
十二月節	○ 早七刻五分	大雪	○ 早七刻五分
小寒	○ 早七刻五分	大寒	○ 早七刻五分

立表測景曆日諺解

柳精子識

立表測景曆日諺解
 文曆ハ中華黃帝に始り堯舜に傳り是れ其の尚書乃
 二典小審なりとありより以來歴代の造曆志多し性古れ
 曆ハ万民に寒暑水旱の時と示し衆氣の陰陽大過不及
 と知し種耕蠶織の時と示し率をきか為小は後世
 國の治より智功謀計と率と世事終く小く人々僥
 倖の富貴と求る小より陰陽日者の流妄に日月星辰の吉凶
 と悟る俗を欺く具とを造り曆道の本意を失はれ其
 歎はるる
 奉朝の性古を何進の曆法採用ひるひりやいまを詳あらん

人皇十六代應神天皇の御宇儒書をりて改りて漢字を
 通せりて時用曆をくんばむるをうづむ其後才四十一代
 持統天皇乃御宇南宋の嘉元曆を用ひらる才四十六代
 聖武天皇の御時唐乃儀鳳曆をかこたりの建隆路の
 廢帝の御時一行禪師の天衍曆を用ひらる才
 清和天皇の御時徐昂が造れる宣明曆を用ひらるより
 以来貞享元年甲子より乙酉の八百二十六年に及まで遂に改
 曆を中華に於て八宣の曆の後崇玄曆欽天曆應天曆亦
 其外歴代皆改曆あり且天文の活物として多を積り之より
 時へ天行ふるの遠ひあるよりて改曆せむんばむべし
 故に宣明曆も貞享の改りて天夜小後ると元禄二日

余合朔も一日の遠ひありけり曆家に 報して貞享二
 年宣明曆と改めて貞享曆と造りて其後清和の時憲曆と考すれ
 亦其ありし一日ありし二日乃其後其いまだ何處り是あり
 奉とありし其後宣明曆と 報して寛政十年に改曆せ
 りむすかりし今の曆是之蓋し曆の徳とるや業氣の遅
 速天の水旱と民に去りし種耕蠶織の時と示す故に
 天下を治るの宝蓋とせむと以て前王曆を宗廟に納て古
 月必告朔の礼を行ひ曆と法度小領ち與へしむる
 と後世古意をりしむるは安小日月星辰の吉凶の之成奉とし
 て終に元禄妖嬪の具とせり嗚呼歎すへし法で聖人造
 曆乃本意を失ふるあり

凶事とあせば疫禍起るといひけ方はむうひて八造此後
徒法奉大古たり

○大將軍 火曜星

考原曰統御武臣之職有護衛虎賁象協紀辨方曰
大將軍居歲方之右者軍事尚右之儀也

大將軍ハ武臣乃職ハ一國宮と護衛虎賁の象アリ也
トク文道ハ左と云ふ武乃ハ右と云ふハ忠に其意の
支の右と大將軍とすたとハ子の年を丑と大將軍
ごするが如し陰陽書ハ云大將軍ハ太白の精上客也一
案微宮方伯の神あり太白ハ令曜星なり令ハ殺伐
と云フ物と殺伐と云る夜にけ方を沫く忌べし

俗ハ三多ふさぐりと云く備環曆もけ方に向て万変
ふろく忍べし一若これを忍小せハ禍災のくるべしといふ

○大陰神 月曜星

曆例云鎮星之精大歳之皇后也常居歳後之二辰
故子歳大陰有戊丑年有亥餘例皆尔也大歳之皇
后也故婦人事凶脏者産期向此方凶

鎮星ハ土曜星あり土也大陰なり陰精ハ陽と電一
陰と如む夜ハ婦人の夜に凶なり

○歳刑 水曜星

呂氏春秋曰歳刑者一歳之中受刑殺故多禍少福
百事不可觸犯之尚書曆曰歳刑者天之陰精水曜

あをりつて万物滅する此方とす

○黄幡 四曜星

曆例曰黄幡者羅喉星之精大歳之墓也万物皆有
生死故有墓其皆歸於土常運轉丑未辰戌方不行
餘方主於土色故名黄又幡者旗也其形如樹幡故
言幡

不行皆生死何の本寅小生して午未死して未を墓と以て火ハ
寅寅小生して酉酉死して戌を墓とす合ハ巳に生して子に死
して丑を墓とす丑辰未戌と大行の墓とす夜ハ亥墓と
いつら土の色ハ黄あり又丑未辰戌ハ四方の隅小居てそのこ
ち幡を樹るのこゝ故ハ黄幡とす

○豹尾 計都星

洞神秘籙曰豹尾者計都星也此神亦旗也最速疾
而其象如豹尾重

此神も亦丑未辰戌乃古よして曰隅ニ在りゆゑハ龍
りつゝ名とす黄幡の向戌豹尾とて九て八将神の吉凶
毎方南緯ハ先に彫刻するところの曆役覽ハ法まびくの
たれハ亥ハ龍と

○月建

循環曆曰夫月之十二支者正月寅二月卯乃至當
極月丑而以可知為毎年不變之定式矣是重而配
合十幹則以其幹支毎月於曆註之其上置建字是

正月八宿宿值月詳記一二月より八略して元宿とをりり記せり是も廿八宿と一宿と十二月配して正月の吉凶を占ふ

宿值朔日

もと六寛政十年正月の下に斗宿本宿値朔日と記せり廿八宿と七曜とを毎日一宿の配して其日の吉凶を占ふなり初日斗宿星されば二日の牛宿三日の女宿と順に配するなり但し性古ハ宿曜經の祝ふありて牛宿を除て涉り廿七宿と一宿の配道せり牛宿ハ毎日の午此時値て若祥乃宿とを然り寛政十年招りて新曆を造らし是れ先と寛政曆といふは改曆以後ハ牛宿を不除宿次とて正月の配道は七曜ハ日月外本令出なり初日本曜されば二日の金曜三日ハ

去曜なり本曜星合曜星七曜星本曜星火曜星のい六星ハ日曜星月曜星の二と合て七曜とい一星

廿八宿吉凶

- 牛宿 若祥乃宿とせば日生る人ハ福徳あり仙事も求むるにふ小祿あり別しては日午の時と又若祥とて
- 斗宿 斗宿と安位ノ宿とす普造作種前婚礼成る法乃を成求り又ハ仙事考小用るふ
- 畢翼 和善ノ宿法藝を習ひ又ハ佛学を學び婚礼成る人小財元後出の彼業ホ小用るふ
- 觜角 魚害ノ宿とせば日歳を圍て災を所兵の徴一械を畧り陳と交一款を被る不利るにす一余りハ凶之

畢翼 斗壁 觜角 房奎 參柳 心尾

鬼軫

胃婁

星張

箕室

井亢女

虛危

昂氏

○急速の宿とす出入學藝を學び或は松子又ハ

後菜に用るに

○猛魚乃宿とす神と祈天神を祭り田獵或ハ

武威成求る小よりとす

○以ハ宿將深乃宿とす神と學び種前後菜ハ

小より

○別柔乃宿とす祭を造火を改め福遷或ハ折

紙と書又ハ蘇礼小用る小より

○七曜吉凶

宿曜經曰七曜者日月五星也上曜于天下直人所

以司善惡而主理吉凶

日曜

以日五宮小入り或ハ兵術を教ハ我ハと習ハ

祈禱業を調合ハ合禱を納め容進學業と

多ハ友位と條ハ小より一教と造るハ志ハ

又日曜六日小値進ハ其年万物ハ小ハ熟又

日曜に値る日月蝕する又ハ地震すレハ万物

のハ千日多ハ小ハて殃あり

以日功法とナリ夜後とナリ髪を何ハハ爪

きり斬ハ夜を忌る小より一但ハ志ハ出

以ハ志ハ一以日生ハものハ智ハ小ハハ貌

以ハ又月曜六日小日に値進ハその事病多

秋ハ至ハ小ハ又月曜小値る日小日月

火曜

結する又ハ地震すれハ多の中夜かや
 け日を飛人と決り盗賊を捕一宝物あるハ
 半を買求め或を動一仏を造る不区業
 と調合し種と前又ハ爪をきりおん進以木ハ
 凶なりけ日不生人ハ意酒一容貌も醜く親
 き人成妨けおとせる性あり又六月六日ハ
 星不値進ハ年中第福多一又け日日月蝕する
 又地震すれハ牛多多く換す
 入学一師長不奉一出行ゆるハ怨敵を降伏し
 去外火伏地震等不吉一け日生る人ハ多病
 一七親不孝之怪む一又六月六日ハ星

水曜

木曜

にあれハその年の中ハ其災ありけ日日月蝕する
 一或ハ地震すれハ百穀熟し人民瘵瘵あり
 わうじき衣と冠一学文と習ひ髪と沐ハ業来
 と裁半を買奴婢と抱る不極とか一幸福未
 一ハ凶け日生る人ハ業を以て業祿あり六月六日
 け星不値進ハ年中冬熟一け星不値る日日月蝕
 する又ハ地震すれハ五公必死
 大人貴人ハ見えあうじき衣被を脱親親おを
 求め又ハ婚礼あるより湯を沐すハ漁獲あり
 一ハ凶なり六月六日ハ星不値進ハ年中第
 授る事あり一又け星不値る日日月蝕するハ地

金曜

土曜

震すれ六畜多く換傷也
 田宅と買精舎と建井戸或ハ竈と造作するにほし
 婚礼或ハあはれしき衣服と着するにハ凶ハ星不値る
 日生る人ハ世ハ名と志しれ朋友ハ依り月ハ日
 以星不値るハ是年の中凶ハ古書傳あり以星に
 値るハ日月蝕する又ハ地震すれハ國中人民安
 泰あり

日蝕

日蝕ハありハ朔日ハあり日蝕ノ下ハ月蝕あり是ハ時下ある
 月蝕上ある日蝕ノ體を弊ハ際して日光を妨ぐ是ハ日蝕と
 以ハ之故ハ天の一周ハ二百六十六度有奇を日ハ一日ハ一度を行

月ハ十三度有奇を行て廿九日有奇ハして日蝕ハ過及て是ハ
 之會する時ハ日を上ハ月ハ下ニ有て日光を弊ハ亦日に日蝕
 之類日ハ蝕るより是れとも日月毎月の朔日毎ハ會合すとい
 へども日月南北ハ去つて是れハ蝕せは故ハ蝕すといへども日
 月の重り中ハに因て蝕ハ淺深あり又日帯蝕といハ或ハ蝕
 たりハ出あるハけあり入ハ帯蝕といハ又月乃帯蝕といハ
 て一周天百八十二度有奇を去つて日月相會是を望といハ
 毎月帯蝕ハ日月相會といハ月南北に去つて交せされハ
 蝕せは是交ハあり時ハ月ハ中天の交ハ有日ハ地ハ下の交ハあ
 りハ大地乃陰暗月の俸ハ障り日の光を妨て是暗とあり不
 是も是より小固ハ盈縮あり月ハ遲疾あり亦名ハ平初あり

はよつろ月蝕ありまは十日十六日十六日の中にあり

尚書曰蝕薄者禍淺蝕深者禍大公羊傳曰日蝕治

德月蝕治刑後漢書曰國無善政則謫見日月變咎

之來不可有不慎こいつろいより蝕ハ

朝廷乃災なりとする友に保りて万玉も蝕の吉凶を曆にみるは

二十四氣

立春

正月乃節春の元立初るゆゑに立春こつ陽氣地中不萌

東風解凍氷ハ東とまゐるゆゑに東風吹かりは時を尽して陽と

生じりつて凍を解くあり凍ハ氷のみにあつて凍氷こつ

たより熱虫始振整ハハシカクルハハ訓也嚴冬の寒き中地中

地中不萌者一つも草木の芽こつある小雉のこえて地

よく出現せんと地中において振ひ動くたり魚上氷魚凍

の氣の昇騰小糸して氷の隙まで透るあり

雨水

正月の中は時陽氣地上に昇り雪氷解て雨水とあする

素魚糝ハ水中の獸ありて為に魚とりて食はは陽春の

をとり小魚を捕て天小佐ト我小食と何之生を保む

るこころ魚の慈被被人として其慈を被せさる人や鴈

雁小鴈ハ雁乃大あるりのたよりヒシクヒと刺す小正とあ

南より水するあり鴈雁ハ陽春ゆゑ小陰とよあつて陽

氣すこに保すよよつて水地の陰被求め去たり草木凍

解すこに保すよよつて水地の陰被求め去たり草木凍

陽の氣に誘れり枝葉萌く動くなり

啟蟄

二月乃辟啓ハヒラクと氣す蟄ハムレカクル、と氣はけ氣陽の氣に誘引せられて地中より出ゆ急に啓蟄と云ふ桃李始萌流布子ハ桃李華と有り少陽に養ひ進て桃李花咲也金庚鳴く金庚ハ雲雀なり嘗とするりのハ飛あり雲雀を陽者ゆ急に仲夏乃氣を受て飛昇す回冬の凝陰ハ時小いづつて委愛と云ふ少陽とあるよつて變化為鳩鷹と云ふ凝陰の精極極の急なり凝陰少陽ハ養する此氣運ハ去とつて極極の急溫和孝順の性となる物理の變化極極と云ふ

春分

二月の中夜陰陽平等の時なり夜ハ晝分と云は時小陽の氣壯りて相陰と云ふ急を至急なり陽氣を裏に滿されを飛ぶ事ありは夜ハ春分の天と符て飛ぶ晝分ハ陰陽等しく少陽乃氣と老陰の氣とを裡小於て飛ぶ夜に雷声を發し電光初りやく雷光ハ陰陽の激するなり

清明

二月の節法乃州本の芽を發生して何の本何乃州と云ふ小初り也急清明といふは時相始萌田氣化為雲田氣ハ至陰の精急ハ少陽の精なり是よりつて急ハ曉

かのづうらん中よりびと抱て鳴く地出地出ハ大
濕土の精なり以時天地委く整陽の氣と秋友小地
整陽不責く是地中に安居く之に由て動て地上に出
五九生以五九を小陽相火乃精時氣不感して生發以

小満

日月の中以時純陽の氣天地に満て万物充滿す
枝葉繁る友小満と云大満といふべきと小満といふ
を万物充滿する初めなり若菜秀若菜ハ二カ十
と別世俗誤つ初春のころ黄を潤州と若菜とか
りり飛く若菜ハ小満のころ黄を定き形菊の花は
似たり跡小自毛のごとに繁なり枝葉薊は似たり折れハ

白汁出藤州死藤州を和名ナズナと別小陽の氣に
氷雪と凌て田陸不生く春分以後は春候清明穀物乃
小寒て立夏純陽の時不立く枯るなり夏秋至夏も
小陽相火乃系なり氷雪と志のき嚴冬も凋を以
時不立て熱以二州をより小陽切を終るなり

芒種

六月乃芒以時芒ある穀物を稼種する時芒を連を芒
種と云端端生端端ハ陽明燥令の精なりて且厥陰風木
の色と帯ぶ令穀物伐の性以て物と戦ふて成好む九
天地の氣ハ春の春氣ハ冬の中に生く夏の氣ハ春の中
生以秋を乃氣も芒に以て友小秋令の氣ハ已に芒種

斗人ハ會政しづじ 蟄蟄居蟄蟄蟄ハ氣乃虫あり和名
キリぐスと訓正以時秋氣乃つる小繁して金生水の化
と以て蟄居に鳴く七月小至つて飛で世に在り毛詩の
蟄不見也蟄乃學習蟄ハ蟄魚の凶者金水の氣を以て
生於土去夏の二季ハ陽和の時也して君子の徳は比
故不可物生於秋也陰魚の時也して小人の奸悪無比
蟄ハ蟄魚の為ゆ也初秋陰殺の氣小繁して飛ぶ事を
習ふあり習ハハツカフと訓正

大暑

六月中を陽次骨に迫つて大暑とあるを陽迫て二陰地
下に生ず陰陽の氣蒸して腐爛化して蟄とある古潤溽
暑ハ時後天坤の卦小過る坤土の陰濕を陽の氣に蒸立
られて天地暑溽是大雨時行陰溼乃氣さうんみしと
時小大雨水

立秋

七月の暮秋の氣立なり以時地中十分に陰氣充ゆ也
涼風至白露降秋ハ金なり金生水の理を以て白露降
る之を燥也燥ハ金明なり以時出れば金冷催すと云
處暑

七月申以時小至して秋陽日く衰弱ありて秋陰の氣自ら
強く小増去す是氣已小衰んとす友に慶是と云蟄乃
祭者先づものふとく蟄ハ蟄魚乃凶者ゆ也秋殺の氣を

秋の初めは穀伐乃性と禱く夜小法をと持んことを秋
してその名と聚て北辰を祭る天地始肅肅ハ穀ありと
淮南子の解不見の秋更て天地自然肅肅ハ穀あり

白露

八月乃第は時秋の室中なる友秋令の色とあつて一
かのづのう白く仍て白露といふ鴻雁来秋信の初を裡
小界の鴻雁ハ陽を中して身不熱す夜小冷を束て
来る玄鳥帰玄鳥ハ寒に若くは夜に寒風の漸くは玄
らんめを恐れくうるなり群鳥害危ハ危をこれお乃
あつて好む水の食と束て冬の食不備あると若くは
のふを殺すく冬日の食乃之きハ縁會と行不況ハ人と

秋分

八月中日猶赤道おきて昼夜の刻等分なり此時陽氣微
く陰氣壯なり陽漸くは衰く陰小秋するなりあこ
ハは故小雷おのづううを収むなり蟄虫塚戸地中お
と遊人とまる貴おのれが穴の口は閉るなり水始涸秋氣
を燥令といふ物を燥をなり夜小あも個く

寒露

九月の節陰を日に増長して寒露降る夜小名く鴻雁
来賓白露の節は鴻雁来といひ今又来るハ後く来る
なり小来りたるのハ賓とあり夜小来賓といひ花入大

為始存を純陽の象なり始を陰物なり此月乾象牙
六世山地剝の卦小値る陰氣昇り極て落人と以友り
剝を落るなりといり純乾の俸以時小至つて剝落し
之崩る友小至氣に誘つて純陽の象大亦落て始
中我天地の變化卦爻の妙於于此觀つべし菊有黃華
月令子鞠の字と以菊の正字なり

霜降

九月乃中け時始く霜降射乃祭獸射ハヤマノイ又あり兎
魚の獸あり友小霜降の陰氣天地の間小充塞也射以陰
氣に射りて魚性益壯人なりこゝに以く多く徳獸を殺し
て天地象るなり草木黃落蟄蟲咸俯徳與皆陽氣を以
て動く陰氣充塞するによつてこゝを陽進陰以

立冬

十月の首冬の氣立ありこゝなり此月坤為地の卦又値る
あり純陰の氣行つる友小水始氷雜入大水為雥雥ハ南方
離火の象あり外陽あり柔色也加ハ内小陰を抱く層も
又亦別陰よりて内柔弱なり是も亦離卦の象なり二物
是貌同性ありこゝ類ハ陽小陰層ハ陰小居以時至陰氣は
誘引せられて雜在中の陽以去て水中の陰小入る層と
成り爰方化造化の妙觀以是地始凍地象氣を以て成る之

小雪

十月中氣の氣結んぐ言と我江霧不見江の事ハ清明乃

下に陰く候す夜ふくも略と天行上勝地也下候は時純
陰坤の卦も値て陽氣陰是偏に古人不謂獨陽不化獨陰
不化りの夜ふ天地の氣も交らばりて天行上勝地也下
候て陰陽交らば交和の道閉塞人をも自挫と内ふ納り
州本もとも指し候はるる冬の色を候は

大雪

十一月の節は時音、よく候るゆゑ又大雪といふ時
晴月令の候は時晴ハ秋の候と目と求る者なりといふ
又阿る虫に小鷄小雛といふ肉翅なりといひ月令の候
の意もては俗に云々若者なり聖人万民も月令を葉
しと村と知ししむるもよと徳人の初ることある考歎州本

を以て候るを况や曰は肉翅なりとの是れ物のなり
てせんや月令の候は時晴ハ秋の候と目と求る者なりといふ
夜ふ夜ハ冬にせらるるも時晴と目と求る者なりといふ
をいふは冬にせらるるも時晴と目と求る者なりといふ
ゆゑに虎始交虎ハ陽中の陰ありのなり陰氣を
以て以て肉の精を増は候て交を蒸挺出蒸挺ハる蒸
といふのあり和名を利年といふは出る州なり

冬至

十一月中日端莫乃南の端もゆく日短き也ハ恒州結地
中の陰氣も迫りて恒州も結るなり麋角解麋ハカモレ、
と何と鹿の角も去るも鹿ハ純陽の獸麋ハ純陰の獸

かりゆ急に麋一陽萌す時日南落廉一陰萌す時日
南落るあり陰陽反覆知んぬべし水泉動一陽來復
て地下に陽を覆す夜に水泉おの流ううごくるあり

小寒

十二月の言は時地中乃陽氣地上の陰氣を過て昇る夜
を陰迫りて多きをけし雁北郷のみに降る小運疾
むる來る時の運疾小仍て陽るも冬と表との別あり
鶉始巢鶉の形かすに似てかく白にぬあり少陽の精之
夜小二陽萌す時の氣小感して巢るふなり雉雛雛ハ先日
もゆくとく離火乃象なり夜小二陽昇登の氣小催され
て發せ發するこ

大寒

十二月乃中地上の陰氣地中の陽小迫りて多きを
夜小大寒といふ離乳乳をとも子を生むたは俗は産の
字を去くハ誤なり許氏の説交小云人及畜生子曰乳獸曰
産といふ人の子誕生むも畜の子を生むも乳と云獸の
子を生む産産といふといひ時鶉雛を生はるを發陽の
氣に感ずる所なり証考屬疾証考とハ鶉を以たり鶉ハ
前件より猶更の考ゆ急陰氣迫切りを殺極の氣候ハ
象として考を措つこと急屬疾とをけしをやくハ急澤
後堅は時地上の陰氣をけしきゆ急水も後堅とあり
く堅きなり

太極陰陽造化乃妙理靈筆舌のよくそはこころな
らんや少しくその端を挙げて垂垂示すのこ

○十二直吉凶諺解

俗日中辰といふ

循環曆曰夫十二直者則曆之中段也陰陽書堪餘
經云上配于星辰下主万物以配於人事故吉凶
最大也不可有不用捨

建曆林問答曰斗柄所指之名也能建生万物故

曰建

毎月の月建の日なり一十二の正月の寅二月の卯といふがじ
能く万物を生じ初しを夜と名づけ建材室と元納系
出乃皆不利ひく大吉日なり志の七と動し舟日の

舎を問う等凶なり

除曆林曰斗柄之前辰也又曰戸曹折衝萬物除

去百凶故曰除

月建の前辰なりたとハ正月の月建ハ寅なり寅のお
を卯なり亥ハ正月卯の日ハ中辰ハ除なり掃除掃除
俗技業等ハ吉なり婚嫁出行井戸堰等ハ凶なり

滿曆林問答曰天之倉曹財貨所也奄覆凶咎滿

蓋万物故曰滿

天の倉曹とハ天帝の倉庫に天室と滿しむ夜に万物満
蓋なり夜ハ滿と云家造婚嫁移徙物裁出乃皆不利也
去と動し等技業ハ凶

平曆林問答曰天上會曹平分万物也又名帝路

故曰平
此日天曹會聚之人間乃万物之平分日也
婚礼移徙乃路之始也
婚礼移徙乃路之始也

定曆林曰斗柄前之四辰也又名大忌能定諸客

月建の前の才四辰乃辰なり
より前才四ツ目なり
大忌と云云
新移等ハ右日ナリ

執曆林問答曰斗柄之前五辰也能執斷万物故

曰執

月建の前の才六乃辰なり
礼考ハ右ノリ
移徙ハ行庫問答ハ右ナリ

破曆林問答曰斗柄所相衝破也又名天之遊激

斗柄相衝と云
衝と云
衝と云
衝と云

衝と云
衝と云
衝と云
衝と云

衝と云
衝と云
衝と云
衝と云

危和訓曆林問答曰斗柄之前險也不可昇高故曰危
 その月々のえとよりハ必あり此日ハ家造種前婚礼酒造
 神系等ハ吉日之考此ハ一宅ありハ其にのる等ハハ必あり
 成和訓曆林問答曰斗柄當相對又名天之主記為事
 必成故曰成

斗柄の相對ハ當るといふたとハ正月の月建を室なり斗
 の搖光室は建正ハ夜ハ時なり初成の刻なり夜ハ正月ハ
 成とりの月ハ成日と云二月ハ月建卯ハ斗の搖光卯ハ建
 ハ亥の時なり故ハ二月ハ卯とりの月ハ成とす卯月ハ成之
 此日ハ家造婚礼立願入学出行移徙ハ穀種前等ハ吉日
 なり神事ハハ必あり

納和訓曆林問答曰謂収斂万物又名天倉故曰納
 此日ハ万の物と名納る日なり夜ハ天倉といハ入学婚嫁

家造移徙可買納る等ハ吉日なり葬送出行穢灸ハ必あり
 開和訓曆林問答曰斗柄之居前也天之使者開險通
 後故曰開

月建より斗ハ三位前あり夜ハ斗柄の居前といハ之ハ天帝
 の使者あり之ハ險絶と開き後來と通融と法藝と學び出
 行移徙奴婢と抱ハ元後婚礼庫園等ハ吉日なり葬礼を
 弁不祥の事ハハ必あり

閉和訓曆林問答曰名嘆星閉塞不通最禁邪惡日也
 天地陰陽之氣閉塞日也

際陽の氣とちかちかうりて通せざる日あり境と築き池と埋
穴と塞ぎ墓と築きあどかか吉日ありそ終ハ法の凶あり

○八專

八專ハ壬子の日より癸亥の日まで十二日の間あり此中丙辰
戌午壬戌癸丑乃四日辰間日といひて吉日ありた之ハ壬もあ子
八日ハ壬も上の十干と下の十二支といひれありた之ハ壬もあ子
もあちり甲も木家も木をりそか如比十干の六行と十二
六行といハ一なる日八日ありそ氣也一なるハあハ八者とい
ハあ日ハ十干の六行と十二支の六行と皆異なり丙ハ火ハ
辰ハ土あり戌ハ土あり午ハ火なり未ハ木なりの日者一なる日
依て吉日と云ハ丙の者ハ十干十二支の氣偏有るあハ人

氣も平和あり流去と有りて滅矣皆不忌なり循環曆云
是利同氣乃幹支相係不棟不傾之縁それ有棟と居ハ柱立
棟上皆不用也亦婚禮ありいハ奴僕と抱ハ六畜と求免賣買
号を介佛祓の事ハ凶なり昔上風雨不旱不澤

○十方暮

循環曆曰入甲申終癸巳統十日間也此併幹支暗
尅而天地四方四隅俱全不和之氣云無相生之前
故總而和合相談門出旅行等凶之

甲申の日より癸巳の日まで十日乃る是と十方暮といハ
六行の氣相尅するゆゑ天地の氣も皆鬱して清明ならず
此十日の者丙八日ハ十干と十二支と互ハざる尅殺すといハ

とも至甲丙戌の日を火生土己丑の日を干支ともに出る
志うれとも土氣の平氣おあは流ゆ急に十方不和の時とて
陰陽家小出行小忌とや加る度ハ其家小あは流ハ強て
忌すとも可あり

○天一天上

春秋命曆曰天一者地星之靈也大一者人星之靈
也尤為尊星俱在天上紫微宮之門外左曰天一右
曰大一主戰鬪知吉凶大一者主風雨水旱兵革飢
疫災害而遊行九宮

天一天上とて天一神の天上へ降りふ日あり癸巳乃日
天よかありのふお糸それより戌申乃日申を十六日のるハ

天一神の法りの方後己酉の日より世界へ下りぬひて
四十四日のる思ふと申ふ方に向て戦鬪すれば弓弩
折建産婦ハけ方おむるハ死に決るハ方へ向ふべし
天一神四十四日のる思ひのふ方南ハ曆後後よつまび
らふたれハ爰ハ略申らふみ後後と足合まべし

○社日

天中記曰社者土地之主也土地潤不可盡祭故封
土為社祀之以報功也

社ハ土地の神なり土地ハ廣潤ありとてとてまつりば
夜不古と云く封トて先と祭て七切の法不報ゆ二月と
八月としかあは流あるあり二八月ハ陰陽の中氣ゆ

めりてまのふあり二月戌妻社と云八月と秋社といふ
中蘇りてハ社中集會して酒宴をなはすと見とく古人の
おも多く破人成助てくる辭などと他まう妻社ハ妻分
は近き成の日たり秋社ハ社分は近き成の日あり古乃神
なりゆ名成の日と判り

○彼岸

彼岸ハ元來曆家の遷日不ゆは二八月ハ陰陽平等の時最
ゆ名天竺の俗この時と時心といふて古昔を修し佛成礼
し僧尼は詔して生死苦海と渡つてかの岸にあらんを
と稱ふとや曆家のゆ不ゆとされは彼岸は次世に
といふの八十八夜

立春乃日より八十八日めたり春霜乃かきりと候茶木とも
け夜の霜不あハ枯傷るといり夜不流ハ八十八夜の別過
霜といふ候冬の寒暖を毛よるべかれと毛以時節まで霜降
るゆ梯たり

○半夏生

半夏生ハ五月の中より十一日めたり循環曆不半夏の茶
より井氣不覆すべし毒氣下るといり妄説若ふべし按ずる
ハ七十二候の中才三十候不五月中候のころは小麻角解
際始つ半夏生まといり菰と毛葉に利る半夏ハ妻生ハ
別不半夏といふ茶ゆり半夏生のころは紫白くある之中蘇
の半夏ハ五月のころは生するやいぶし茶州の半夏は毒あり

と本件は見えたり又夜中夏生より毒氣降るおとゞ倍説は
いり必しも恐るべし

○入梅

入梅の節多くなり天中記は四月の節乃後庚の日辰入
梅とし五月の節の後壬の日と出梅とし前夢兼時記は
五月乃節の後壬の日と入梅とし六月の中乃後庚の日辰
出梅とし曆府通書は六月の節の後丙の日と入梅とし六
月の節の後未の日辰出梅とせとしり志うれども新曆に利
ふれを本州綱目時珍が説と利ゆ本州綱目水の部不時珍
が説は六月の節乃後始の壬の日か入る六月節の後壬の
日と終るとは二十日めり明なり入梅雨の氣に中道は病を生

物まをれを受進を微を生せととりぬる微ぬと毛り不説
毛季すも違わは本州綱目の説と説と毛とす

○三伏日

三伏日を種蒔療病種りすて和合のりみ月の趣うづぎ其
夜は四季乃うつと行ふまう秋の令ハ冬乃水と生し冬れ
春ハ表の本と生し表の本ハ夏の火と生し唯夏の火の秋
の令と魁は所訖ハ夏並才三の庚の日辰初伏とし才四
の庚れ日辰中伏とし才六乃庚乃日と末伏とし就中末伏
を忘べし秋乃令ハ夏の火を伏さるるを

○二百十日

孟夏の日より二百十日めなり世俗二百十日二百廿日ハ必

大風乃吹くより乃やうはあつり大なる濕りなりは時節ハ秋
 の寒井あり多しよりて本氣令氣に制伏せられて去十分
 不發せざる年ハ必秋よりて本氣の發發ありそ發發多
 くハ二百十日二百廿日の前後ハ有り也ハは時節世俗ハ風紙
 怒るかあるはくもは日よかぎりて風為ハ何くはある人の説
 二百十日乃了後ハ中福のむらり二百廿日のころハ晚福のむ
 さうりたるをりつて大風を怒るとと

○土用

天地乃暑おみ乃の氣循環を去るはとも四時不固て互ハ
 互とわりの寒とあることハ去る本を去るはく火令氣ハあ
 夏ハ火を去るはく水本令氣ハああり唯去のハ中央位して六

乃中乃滋乃さるなり也ハ四時ともハ十八日廿六刻ハ旺
 たりこれと去用といふ一年三百六十六日有奇と四季ハ分
 る時ハ各九十一日餘なりは内各十八日廿六刻ハ四季各ハ去
 用たり殘七十二日六刻ハ去と去夏秋冬各うる日數と去本
 火令氣ともはく去より生して又去ハ帰る也ハ四季乃終
 小ハ去用何り是を四時といふ季ハ去と去終終末なり刻
 四時の去用乃日數を合して三百六十六日廿六刻なり去用
 去去ハ旺して旺去の氣大過して變化ハ多し時夜万物之
 去氣を去去ハ減去と去去日の子ハ新曆不用は去去
 去去略也

○下段

と以て月法とす二六月も本あり故小甲の日と以て月
法と以て七十月も本あり故小壬の日と以て月法と以て八
十二月も本あり故小庚の日法以て月法とす其月の尚位
の十干戌用る故小月法と云ゆつとも大者日なり

天赦

協紀辨方曰原始云天有五緯歲星為仁而甲應
之鎮星為德而戊應之仁德之神莫甲戌若也甲
為十干之首戌為十干中寅申為春秋之始子午
為冬夏之中用支之始則以干之中配之用支之
中則以干之始配之故春戊寅而秋戊申夏甲午
而冬甲子乃天地合德之辰天地生心之所見端

也故曰天赦

詳小釈する小及に乃の力をすに隣りあはたると外乃
日不值ふと天赦の威力によつて隣りあり

歲下食

尚書曆云歲下食者天狗星之精出食日也又號
深惡神日六十一日一度出食一歲六食是輕凶
也但支于吉并者用之無咎矣

天上に天狗星といふ惡星あり此星六十日ゆふ一交下
界下り食するなり一年に六日食する日ありといふ往古
より傳へ來りし事ありと妖妄奇怪君子の用也へきこと
小あり

曰天門三曰天從行十二節

姓亡ハ五亥より七日めと啓蟄より十四日目と小寒より三十日めあり出陣退軍旅乃出船等ハ凶あり

歸忌

曆例ハ云歸忌ハ天樞星の精あり以星上ハ紫宮を徹下門額を防およそ曰乃名あり一ハ凶忌と云二ハ凶化と云三ハ天の小女と云四ハ帰來と云世實子の日は天より地より下り來りて人家の門より看て人の家へ歸り來るを防ぐわう夜よ此日を空行歸家福徳婚嫁入國等ハ忌あり是時亡日あり穢より起し歸るハ必也此日を忌む

復日

復ハ再復の意あり夜よ若ぬとそハ再むする意あり夜よ若るハハ用也べし凶なりハ用也べし

五墓日

十二運の中乃墓の運ハ值る日ありハ初皆生死あり夜ハ六墓といハ古と動一華礼墓と築等にかう忌む

鬼宿

鬼宿ハ二十八宿の中において亥上の若者之ハ宿の值る日ハ百隻火若あり

天火 地火

當日ともハ初の新相互ハ妬殺する日之夜ハ凶日と云天火ハ棟上家根等若にハむべし地火ハ礎と居根等

建種符等小忌べー

十死

四衝曰極とく十二支相互につまやありて死亡せざる定
小五あり十とを数の十といふは極とく衝破りて不
純死亡するといふ意小て十死といひ百子に忌むべー

黒日

一名受死日とも俗に日といふあり曆中才一乃
悪日あり法に忌むべー別して病人と吊ひ業を扱
あるひ八歳灸旅行葬礼等もふくむべー

齒固

齒ハ腎の存あり腎ハ精を納め精ハ命を包む人生の元

飛馬始

を醫より故小特奉に鏡符を祝し冷不蕭隘といひ
け説終くくく知るりの穢ありあるひを水火始といふ
或ハ姫始と云て女工の縫績の業といふ者飛あり飛馬
をいふハ田舎に相ふるをいふて産神へ系指するを
飛馬始といふあり今も田舎にてハするりなり系馬
あるりの初とあるなり其化綦組をいふ種漬化固等
於りく秋するにちよをいふ夜に略し

立表測景定節氣者

表とハ八尺と長表といひ四尺と小表といふ地の方
ありとらに右の表と建冬と夏との系と測りて

